繪本通俗三國志

四編

八

東京圖書館

和書門	小說類	二六函	七架	七八號	七五冊

繪本通俗三國志四編卷之八

目録

明治十年交換

許褚赤裸戦馬超
馬超歩戦五將
張郃入魏難楊修

許褚赤裸戦馬超

曹操ハ渭水の北ニあつて。陣屋を造らんとするニ馬超西凉の精兵を引て。日夜を分ず。しきりニよせ。その勢ひ雷電のごとくなるゆへ曹操が勢日を重ぬるごとく。陣屋の要害いやごとあらず。野陣を取て拒ぎ戦ひしゆへ。右ハ始終おしうるゝとて。俄ニ船筏をもつて渭水の流ニ浮橋をうけ。南の岸ハ相通じ。北ハ三ヶ所ニ分て。曹仁兵を下知して。河を中ニ。南北の岸ニ陣屋を建んとすゝめく。材木を運ぶ。兵粮の車をもつて四方を囲ム。諸軍その中ニ陣を取て。ムぐらを城を築んとて。西凉の兵をもつて。馬超ニ告ルゆへ馬超兵ニ命じて手ごニ。乾ル柴をもたせ。

硫黄焔硝の類を帯て。馬超が旗と韓遂が旗と
馬超がさせ。二人南北さまよれて。毎日曹操が陣をそゝよせ。草をつ
を柴をわりもて火を付さんぐゝを攻りまゝ曹操。拒ぐことを得ず。陣
をまきて走りりるわるを。三が所をうるを人さる浮橋をうらびを兵粮の車。
尽く焼て。西京の軍勢大を打勝。南の岸を陣を取て。渭水の流
を截住り。曹操。陣屋を作るとゝ人どもをうをこを打破らるをけ
まべ。人の内憂ひ怕を。諸将とあゝを計を議を。荀攸が曰く。渭
水の辺の土をゝを築地をらきへ堅く守りて戦ゝべ。曹操さら
をべとて。人夫三万を遣し土をうるを運んで築地を四方を構へ
人とをまべ馬起をるをきゝつけて。龐徳馬仙をのゝ。五百騎づ
つを付往来乗ぶごとくを蒐たりりまべ曹操さまを拒ぎ糸殊

大河の辺の土をゝを築地をれば小石交り
の沙漠をゝ尽く崩を落。をまをゝを計極りゝぐせんとゝを
苦しむ。ときを九月も末をゝを北国の習をまべ天気をゝをゝぐ
冷ゝく。形雲四方を布て。数日晴ざりゝべ両軍をゝぐらく戦ひ疲
休て。雪のをるゝて相待りる。曹操へ諸将とあゝを計を議をる
わる。忽ち一人の老翁来りて。對面せんとて求むをるゝちをべ
入まとて。をまをるを人とをりを常を替りて。上長ゝて下短く鶴
骨松姿。その形凡をるゝぐぞ。問べもと京兆の
人をて。姓南山を隠居をる。妻子伯道号へ梅居士といへも
のをりと答曹操。客の礼をゝを敬ひりまべ老翁が曰く。丞相
久く渭水の北を城を築んとをゝをゝぞ時をのゝを用

ひまゐざる。曹操ゞ曰く。小石交の砂まゝ築けどゝ。いまゞ赤らゞ老翁いらある計ゝある。祢ゞ〳〵ち教ゆ人老翁ゞ曰く。丞相の兵と用ひゆゝと。神ゝ通ぜるゞ〳〵ちゆんぞ天の時とまりまゐざる。每ゝ久く雲蓋て。雪の降て烈しけまゞり。北風吹起らゞ。ゆゝまらゞ大ゝ凍ゆゝ。その風の生るて待てきゆゝ王ゞてまゞ水とそゝぎゆつゞ。一夜の内ゝ築地堅固ゝ備らん。曹操ゝまゝときいそん悟り大ゝ喜び。拜謝しく老翁ゝとゞゆ置重く恩賞せんとゆひゆまゐ。老翁一切も受ゞ。袖てそらゞて去ゝりゞ。その夜築ゝたゞがいゞ。北風俄ゝ吹起り。凛々として烈うりはまゞ。曹操ハまゞそ待呼の夜ゝりとて。大軍とゝゆて土てまゞ。纔の嚢ゝ水と盛て。その上ゝそゝぎたゞまゞ築ゝたゞゞ尽く凍り固り。夜の明方ゝ

い水と沙と一面ゝまゝゞて。究竟の城まゞゝ成就せり。西涼の敵軍。遥ゝ城てのぞゝゝて。ゝゝあゝ〳〵ゝ愕き。神の助ゆらんと膽を冷ゝ。さゝゞゞゝのまゝゝて閣ゞ始終あ〳〵ゝらんゆゝきもせよゞけ破りゝんとて。馬超西涼の大軍て率〳〵。鼓て打てゝき叫んでゝゝゝゝゞり。曹操ゝ老翁の教ゝゝゞて。城てゞゝ成就〳〵けゝゞゞの内深く喜びゝゞゞら馬て乘出〳〵て。許褚一人後ゝ従ゝ曹操。鞭てあげてゝゞりゞゝゞ曹丞相ゞゞ一人ゞゞゞら馬て出〳〵てゝゝあり。馬超出来ゝ。一言て言ん馬超ゝまゝてきゝゝ槍て横へて馬て出〳〵ゞゞ曹操ゞ曰く。汝ゝのゝゞ味方の城ゝ成ゞゞてゞゞむきゞゞ。一夜の内ゝ天よりゝまゝて築ゆゝゞゞゞゝゞゝ。ゝゝゝく降参せゞゞ。馬超大ゝ怒り。牙て咬て深く恨ゝ走蕙

曹操

夢梅居士
曹操神翁の教授ふ
一夜凍城を造る

て突死さんとせし人ども曹操が後ろの眼真圓にして光一百錬の鏡の如くなるぶときの大将手に刀をひさげ馬に白袖ませて立ちまへばされい聞る。大力虎侯と云べし。許褚あらんとてあわてて軽々くいたるに得ぢすあいち鞭をあげて汝が軍中に虎侯とよべるくやのありときしぶ。今いづくへ逃去りとよべくまへ曹操が曰く。すでに虎痴許褚といへる大将あり。なぞ天下の鼠と憚らん馬超きたるもあへぬ。突てからんとする。色を変へまへ曹操が後より。一人馬をのり出して。熊都の許褚ありとよべくる。威風傍をはらひて眼の光星のごとくなれば馬超もんぬや怕をたりけんあへて前をさまんとせず。卒に馬を返して退きけまへ曹操も又引て回る。両方の軍勢ともに駭然たらざるといふものなく。身の毛を立て怕をあへり。曹操諸大将をむかへて。敵も味方も許褚あるとて恐るべき虎侯とよべいまへ許褚がいかに其四日ならぬ。馬超が勇力軽々く敵しがたし。許褚が曰く。某ちからにて勝負を決せんとて。使をかへて戦書を送り。虎侯四日馬超と戦いと決せんとて遣しけまへ馬超をまを聞て大に怒りあるとて右手をあざむく。ままらるまで虎侯が首を取んとて。即時に批回して。左の日両方の軍勢尽く出て。陣勢を張馬超へ龍徳を左備に。馬岱を右備とし。韓遂を中軍を領せ。鎗を提て馬を躍せ虎侯へちかづきて出ぬ。おのおの勝負とせんとぞ。曹操さいまを見て。諸将を顧て馬超

呂布が勇を減ぜたまふよく敵せんといひまへば許褚きもあへず馬を躍せ刀をふるひて駈出馬超とたゞ二人火華をちらして百余合戦ひ馬疲れたりとゆゑ軍中へ入て馬を乗かへ又討て出て百合あまり戦ひ一ども勝負の色なへざりゝば許褚怒りて軍中へ乗せ回り甲盛とぬぎすて袍を解て赤裸なるを馬を打乗てうけ出又馬超と火と散して戦ひまへば両方の軍勢震ひ怕る又二人三十余合戦ひ許褚威て震ひ勇と逞しくして刀をあげて八さと砍まへば馬超身をそらして避けて鎗と取のべ許褚心板を突んとまへる許褚あまをさけて。その鎗を脇はさみ刀を地へ捨て鎗を奪へんとまへば馬超奪ひまじと引合わどゝ許褚喚声雷のごく卒を中より引抗て手本まがりを馬超が方へ残りさんぐを打合たり曹操おもとゝて許褚が失あらんとて怕へ夏侯淵曹洪へ兵を引て出よと下知をまへば龐德馬仙その気色をみて左右の備を一手へあへせ面もふらずに討て入その勢ひ電光のごくまへば曹操が勢大よわを許褚が鬨矢二筋射付られ城中へ逃入まへば馬超追討へ壕の辺まで攻付戦ひ勝て退きれり曹操へ引びゝく兵を討きびゝく守りて出ざりれまへば馬超も本陣へ回て韓遂へ入るへまを悪戦たるものと多くうたれども卒へ許褚が戈きをめてこゝだ。おまへ真へ虎矣ちりと感ドルる曹操へ馬超を破るべき計ちく。夢て徐晃朱霊へ四千余騎を付て。おのゝ渭水の河より西へ伏置たまへそをへ使を遣して早く敵の後より

攻られ。ほと大軍てゐして前より荒り夾んで討と下知とす。時に馬超数百騎とゐてとしよせ。住来馬と乗せて。勇と振ひ威と輝らしるまへ曹操矢倉の上よりおいまとして。盛と地とあげうけさ中りるへ馬超へ尋常の敵とあらず。奴が世とあらんうぎりへ。まいぐしてんて安んずることと得んん。死して身と葬るの地もなるべし。夏侯淵おもときいて。安らぬとられ。味方の大将数ときらざる中と。馬超と敵とするものくしして。丞相のんて安らざるむ。某ちゐて命とおのれとて。馬超と共と討死せんとよぐり。卒と平下の兵千余騎と率して。門と開ひて出るへ曹操きうとそぐむとども。耳ともきて入まと。一陣と備と立て。真地暗とくりへ。曹操もその失あらんとと怕まそ。ぐうら馬とのりて。尽く討て出り馬超へ敵の出るとて。きうと引回して。後備て先手とし陣野とひらて張夏侯淵馬と乗して来りるへ馬超槍と拍ゐて突て出大野の中へ蒐入ゐて。さんぐと戦ひるが忽ち曹操とと付て馬と乗して蒐ルへ曹操膽と冷し。馬と回して城中へ逃走る馬超精兵と駆て追討と攻さりるへ曹操大半討まてきんぐとあるりとりへ馬超へ馬と乗して追蒐る不と。跡より兵ども走り付曹操おのんで一手の勢て蒲阪津渡し湄水の西と陣屋とらまへて味方の回る路と塞げりと言へ。馬超大とぐろきいそぐ本陣と回ゐて韓遂と相議へ曹操が勢おのんですぐ後へ廻まり。前後と敵と受て招べきと使まるしとゐへ大将李堪が曰くおきうしおまで攻取さる地と

曹操に返し和睦を請て戦ひを休春の暖まるを待て別に計を
なす韓遂が曰くまの計もまた良しやく使を遣しつゝ馬超猶
豫して決せざりけるに大将楊秋戾選二人来りて
和睦をきゝむまとよりて卒に楊秋を使として曹操が陣に遣
し韓遂馬超地を割て和睦し再び境を犯さゝるべしとて
書簡を送りけるに曹操が曰く汝まづ回まで帰ぬ日使をまつて
答べし楊秋をでゝ回りけるに賈詡来りて曹操に見て曰く今
馬超和睦を求む丞相の御心いかん曹操が曰くまづ汝が意見
をきかん賈詡が曰く兵不厭詐とこゝを中せまづ詐りて和睦を許
し後に間諜の計をもつて韓遂と馬超とをうたがはせば一鼓
して破るべし曹操手を拍て笑ひて曰く天下の高見なるべし多

相合いは御辺が計いとまるち心腹の機密まり外に泄さゝるを
うまとて即時に使を遣し和睦を求る上に別事なしまた
まづ兵を収て都に回るべしさやく汝が取たる河より西の地
を回せとて返簡を送りぬまるち手下の兵を下知を傳て南の岸へ
浮橋をうけさせ軍を退るの気色をまると馬超まの由をきゝて韓遂
にむかひて曰くいま曹操和睦せんと約をまし浮橋をうけて都に
回るの体をまるまるこゝ元より変雄をまして詐の計きゝて
若真の和睦をうとて油断せば却て大なる敗きをとら
ん曹操が大将徐晃朱霊二人渭水の河西にあひて陣を取
まるまるも用心をくてい叶まじ某と将軍と二日づゝ代て今日曹
操が方を守りて次の日に徐晃が方をまもり兵を分て前後に

備へ。

馬超韓遂二人二手に分れて前後を守り。和睦の詐を以て用心なし。

馬超歩戦五将

と用心なる由曹操が陣に来たれば曹操笑ひて。賈詡に

問ふ。計成就せりと。間者を放て伺ふに日に韓遂

此方を守り馬超徐晃が方を守ると。告げ来たれば次の日

曹操諸将を引て陣を出で武具を調へて一騎進

出さり西涼の軍勢いまだ曹操を見ざるものあり是我なり

と出て来たる曹操錦の袍を着て駿馬に跨り大音あ

げて。汝ら西涼の勢が曹丞相を見知れる者か。

目四あり口両あり髭ど口両あり世の人に替りたる智謀の深

のこと聞とよびて震ひ怕る曹操人を韓遂

が陣に遣して韓将軍と。もとより仇なく。とゆる古の故人た

りしが。一旦事の変に会ひて。いまだ合戦に及ばず。いま戦を休

和睦せる上に向後の遺恨。ともに己が兵を収めて。

に本国へ回らんとて。馬に乗て一人。御出ひ。

とて。刀を解て一人陣を出て対面せんとて。遣しられば韓

遂これを甲を着だ。曹操が陣の前に出さり。曹操近々

と馬を寄せ。疎遠の情を述てヤ。

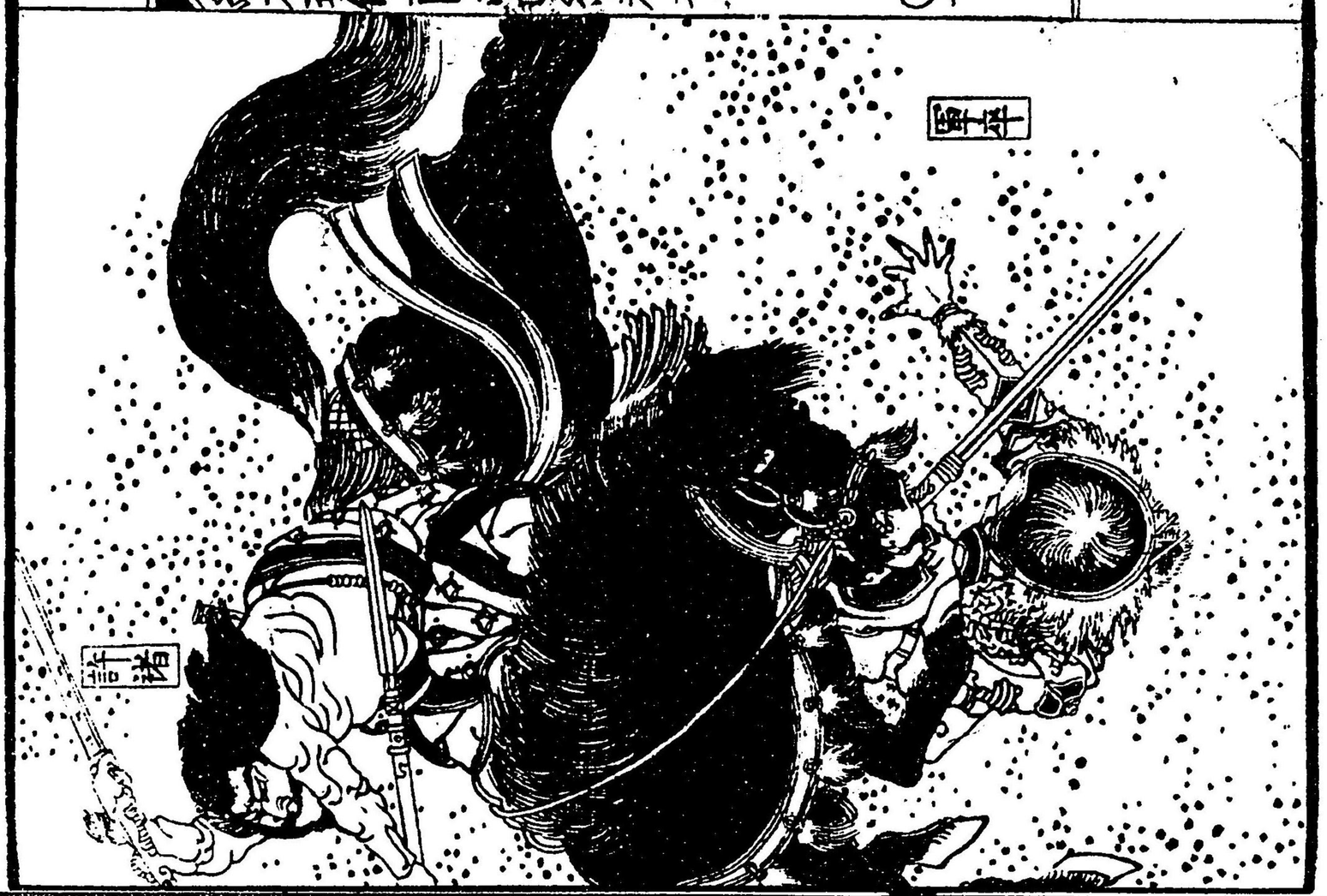
廉に奉らる。叔父の礼をもて。

軍と共に官にとゝみ。おの人ど年月を送りが。将軍いまだ年幾ど

韓遂答て曰く。某ども四十歳なり。曹操が曰く。むかし都にて共

の青春の少年たりしとき。風景を尋て真あるを遊とする中も。
なや中老の為なりしるぶ。何う天下の太平となるとゆるん安く樂
べきぞとて。今昔の物語の一時あまり馬をたらべ大に笑て別き
りれぬ。ある人の由を馬超に告ぐ。馬超いなの日徐晃が方をゆる
れて。河より西の居さりしぐさのゆてきいて早くみせ回り。韓
遂の間て曰く。今日曹操と馬をたらべてゆるゆてる語りの。韓
遂ぐ曰く。たぐむ都みてとゆる遊びしるゆて語りのこちる。馬超
ぐ曰く。定て合戦の事をやさゆとへまず韓遂ぐ曰く。曹操たぐむ
しのゆて語りて。合戦のゆて云ぐ。ゆるもゆ又ゆるゆ云ぐしく
去りぞきたり馬超の内大に疑ひちぐら。黙然として坐みり曹
操の陣中に回りて。賈詡とよんで曰く汝今日の計て去りたるふる。

賈詡ぐ曰く。ゆる迚今日の計てゆるゆとも奇妙なりとゆるぐ
らち。ゆるゆやぐ足ぐ某一川の計あり。馬超と韓遂とぐんて疑
ひせて。たぐへみ川ぐら害せゆやん。曹操喜んで曰く。彼ぐへくゆき
うん。賈詡ぐ曰く馬超へ血気の勇みして計の大事て去らぬ。巫
相ぐ川ぐら書簡て封じて。韓遂に送り。その内の文字て朦朧
みして。肝要とるゆしきたるへ。ある人川て書あらとゆ。又雌黄ゆ
んどて塗て衒ひ飾りぐく封じて。韓遂ぐ陣に遣しるぐ韓遂
ゆきとて。んぱきゆやしまん。ゆるときへ馬超その気色て疑
ひ。ゆるらぐ書簡て求て。ゆきとるゆて。もし肝要るゆて
改やたるとゆんべ。ゆるらぐ深く韓遂て疑ひ。ゆきゆきらせ
み。右あらさやたりとゆんべ。ゆるときへ向に馬とゆるべて。物語


馬超

馬超
許褚
馬超と許褚と戰ふ

はかりし。計よく應じて。馬超がんの内疑ひ怪むべし。疑ときへ陣中うちうちで乱て生ず。その乱を乗てひそかに間諜の計を行ひ韓遂が手下の大将を味方に懐てうちで馬超を生取べし。曹操手を拍て喜び即時に書簡を調へうのあんべしと。ぞ〜きわて書あつらへよく〜封じてそざとあやげるる使を仕立韓遂が陣に遣して。馬超がきたるをうかがひ。仕たりけり。案のごとくかの馬超に告るやうのあり。只今あやげるるのよく封じたる書簡をもつて。韓将軍の陣に来るをりとのべ馬超をうかがひ猜ひたぐちに韓遂が陣に行て問て曰くいかに書簡のきたりしへいかるるべそ韓遂が曰くたゞ曹操が音信を通ずる書簡なり。馬超その書簡を求てひらきこんるに。諸所に朱を加て書あらためかゝ故あらんとかゝ不ん朦朧にさだうなるらざりけるべ怪んで問て曰くちかるべ人に右文字をあらためかゝ韓遂が曰くそのべ人を去らざる本より此のごとくにして送来たり。馬超が曰くちんぞ蒲柔をかけて。人に送るとかゝをあらんおまへらるで我ホがきたりてこんとて怕をて。早く書あらためかゝ置るべるらん韓遂が曰く御辺ちかべ人に疑ひ量を曹操あやまりて草稿を封じて送るらん馬超が曰く我んさらに解ず曹操が容易にあるべて世に双ちかべ英雄なり。ちんぞあやまりて草稿を送るべきうるに。おちかべて決とあいせとかゝに曹賊と計んと約せり。いかにかゝとてんに変じたる。韓遂が曰く御辺さわどとうるとて疑ひぬ日にて陣を出て

曹操と呼び對面せんと誂り。二人先日のごとく馬をあらべて語るべし。御辺なるたいらの藏を居て。たゞ一鎗を突死し。又おなじくの信と。あらかじめ馬超が曰く。しかるべし。馬玩楊秋侯選なんどを出だん。次の日韓遂が李堪梁興馬玩楊秋侯選なんどを出だん。馬超をたいらの伏て。人を曹操が陣へ遣し。韓遂將軍に祢ぐへくを曹丞相へ對面せん。こゝにうら馬を出し。又曹操おもてきいて曹洪とよびよせひそかに計て私語りうら曹洪計を受こゝにうら数十騎を引て陣を出立々と韓遂が前へより。馬上より礼をあつて曰く。曹丞相。昨夜將軍の送り給へる書簡の意をうけて。さぞ喜てあるべしと。いへり。さて馬を回して城中へ入れ。馬超あの体をうけて怒怒り。鎗を提て躍出汝曹操とゝあいせ。こまを欺ひて殺さんとするとゝ。韓遂又突て惡るゝ。五人孔大將さんぎりとぶめて陣中へ。ゆ回る。韓遂再三詐なきよしといへども馬超さらに信ずゝど大に怒りて去りまゝ。たゞきまうるく。五人の大將とさへのりを義をうる。楊秋が曰く。馬超つ孫おのまゝ武勇あるにて將軍を凌ぐんあり。もし曹操に勝ことを得ざるえして將軍を軽んぜゝ。某愚意をもつて曹操に降参して。長く身の安きことを量りの。韓遂頭を揮ていく。又馬超が父と兄弟の好あり。安ぞ曹操に降るべき。楊秋が曰く。馬騰都へ上て謀反を起しゝとて。曹操に計をたゝ。今將軍あるの人。逆臣の子を扶まるの人ぞ。韓遂が曰く。

うらべ汝が意見はいたがはべり。たゞちに其の由を曹操に報ぜよ。
そのあらんに楊秋が曰く某孫が行んとて。即時に書簡
を。とりて曹操が陣に行。降参の由を告るまゝ曹操。ひそかに
喜び。韓遂を西涼侯に封じ。楊秋を太守に封じて。其外
の大将。おとゝ〳〵恩賞あり。ゆれば楊秋恩を謝して本陣に
回り。韓遂に向て。曹操が敬ふよしを語り。今夜火
を付て馬超を内外より攻。曹操が兵を引入れて。とゝまる馬
超を生取んといひまゝ。韓遂大に喜び。おのゝ曹操と。
合図を定め。乾草を用意して兵の手分を備へ。五人
の大将も剣を帯し。側に侍立し。酒宴を設て馬超をも
招き席上にて。殺さんとして。計を定めまゝ。馬超元より

り。疑ひをなせど招くとも軽〻しく来らじ。よき計やあると
て。相共に評定をし。曹操〻火の手にあぐるを合図にとぐ〻
荒まとて。騎馬の精兵を處〻の詰りに伏置いまやくと。
待うけたり。馬超が内に深く韓遂を疑ひ。孫を間者とう
けて伺へせけるに。今日の気色徒なるあらだをとてきつゝ告来る
馬超おもてをきいて。大に怒り。即時に龐德馬代をよび汝ホ軍
馬を備て用心をよくするなどの急なる来あらんといふ。又一
人走り来りたゞ今韓遂五人の大将と。曹操に降参し。将軍
殺さんと計ると。告けまゝ馬超いよ〻怒り。こゝに五人
騎を。おたがへ龐德馬代を後備として。韓遂が陣に行。馬
り飛下。油幕の内にとゝまゝ韓遂五人の大将と計を相談し

て揚秋ヤリ入へ事延引とんでうらだすみやうゑ行べし。馬超お
らへとど。剣を接く躍りうつり。賊ホおゑ人ゑまを害ちんとす
計るぞといふく。韓遂が真甲を破んとするゑ。韓遂大ゑ怒き。
左の手をもつて拒んとすべその手。肩より斬落されとり。五人
の大将。おの刀を提ぎて討て荒りまれべ馬超退ひて油幕乃
外ゑ出大をちらして攻戦ゑ。五人の大将馬超を囲んで。おやき
叫んで。戦ひるゑ。馬玩をとで馬超ゑ斬まく死りる。四人の大将
おの退ゑ戦ひるまべ馬超勇を振く。又梁興を砕倒さて残
る三人の大将おまゑ怕れ。逃去けまべ馬超又油幕の中ゑ入。
韓遂が首を取んとおとゑ。紫人をとゑく。已ゑ外ゑ出なり。是
ゑ入て。油幕の外へ飛出ルまべ忽ち二ゑ所ゑ火の手とあげて喊

の声。大ゑ騒へ。馬超をとで。馬ゑの入て四方をとまべ。うぎりお
き。大軍四角八方すりぎ出厳徳馬伝とさんぐゑ戦ゑ
ときゑ四方より火をとゑ。鉄砲地ゑひびいて。曹操が勢乱ゑ入る。
馬超騰を冷し。兵を引て。ゑけ出んとされば。新褚真先より討て
荒り。後より徐晃左より夏侯淵右より曹洪潮の湧ごと
くゑ攻来り。追取おまく。あゑまごと操だりしべ西京の勢
大ゑ乱ゑく。討ゑ。の数ときらで。馬超ゑ大勢ゑ阻てら
れ。厳徳馬伝出もゑくざりまべ。うら一白騎ぞうもと引て
渭水の橋ゑ引出さりとゑ夜ゑ若々とあけく。西京の大勢
李堪一軍を引く馬超を討んと追来る。馬超おゑ。ここで取
て回し。鎗をひ振て荒りまべ李堪怕ゑく逃去ゑ。

曹操が大将于禁背より攻来り。弓を引て馬超を射たりけるが。馬超早く弦音をきゝて身をそらして避けれバ。その矢馬超をそれて射超え。前なる李堪が背に中り。馬より倒に落て死す。馬超これを見て。きつと馬を回し。又于禁に突て蒐りければ于禁怕て逃走る。馬超橋の上に陣を取おくれ馳の味方を待合さんとすれバ曹操が大軍前後より取まき。許褚ハ自ら虎衛の軍を引て真先にすゝみ雨の降ごとく矢を放ければ馬超鎗をもつて打落しつ。あたかも蝗の飛ごとし。馬超兵を引て半ハ河に漬り。勇を振ひ力を尽して討破らんとすれども六七度にをよびしかども敵の囲厚けれバ叶ずして。又橋の上に引かへせど曹操が大軍次第にちかづき。弩を持る兵放て甚危く

見へけれバ馬超と叫と喚く大勢の中へ突て入る。相従ふ西涼の勢ミな諸處に隔てられて。尽く討れしかバ馬超とても逃れぬ所と思ひ只一騎大勢を蒐破り。路を尋径て出んとするに弩に射れて馬より落たるを。討れぬべく見へたる所にたちまち西北の方より一手の勢殺到し。真先に進むハ龐徳馬岱なり。馬超を救て馬にのせ。一方を打破りて西をさして落行けれバ曹操この由をきいて問て曰く。馬超が兵いか程かあると。一人答て曰く。千騎にハすぎざれバ。曹操が曰く。さらバ速かに程のうちあらん。汝等もろもろの大将日夜を分たず急に追かけて討とれ。もしその首を取来らバ千金を賞し萬戸侯に封ぜん。生捕きたらバ大将軍の次とせん。怠るまじきなりと下知しければ諸

の大将なれども先づと追うけ。喊の声天地と砕く。馬超が身も疲れ馬も弱りて。拒ぐべき力なく。相従へる兵も次第に減じて。歩立ちなるりのどもが尽く生取る。曹操が大勢弾と暴てまくり。追うけーうべ又取て回ーて。大に戦ひうけ出て味方と共に。只三十騎に射なされ麗徳馬代はさんぐに操立ち直隠西臨洮と望んで。逃去りまでぶ曹操ぐうら安定まで追うけ。馬超ぐ。遠く落のびたるとて。兵と収めて引回ーし。長安まで来りまでぶ都より。荀彧が早馬到来ーはやく兵と收て。回りの人と。催促さまに依て曹操。もろくの大将とやーあり。めりるに韓遂へ左の手と斬落されて。残疾の人となる。曹操をれいち西涼侯の職と授て長安にとどまりた。

楊秋侯選ぶと列侯に封じて。渭水の口と守らせまるるとき。涼州の泰軍楊阜字は義山といひりのあり本天水郡の人なり。長安に来りて。曹操に見て曰く。馬超へ韓信英布が勇ありて。深く羌胡のんとねたりへいま業と基と根と絶のへどんを他日気力と養ひまーて。又大に蔓らんぶ孫がくるる丞相すくおもへ人曹操が曰く。まーと久べくくおのれあり。都の中へえるく。南方に事多ーく久べくおの留るべうらだ。御辺すくるが為に西涼州と守まと。楊阜が曰く。尊命。手をむくとと得んぶ。おのれ韋康と中人あり。もーおまとまりて。涼州の刺史ーと。其と九に兵と領て冀城と守らべ。馬超おのがうらーーれで。楊阜が曰く。丞相いま都に回りまーとも大勢と長安

軍兵
馬玩
楊秋
韓遂

馬超憤発
韓遂等を
陣中ふ斬る
馬超
梁興
侯選

を残し置て。後日の援とぞなしぬ。曹操が曰く。さてはその備あり。汝人を安んぜよと。ひたすらに楊阜わかれて出でぬ。諸大将問て曰く。初め馬超が勢潼関を据え。渭水の北へ路絶たり。丞相河の東より馮翊を討ぬと。却て潼関を守りて徒に日を送り。後に河より北へ渡りて。陣屋を造り。固く守りて。動きもせざるは。いかゞ教ぞ。曹操が曰く。馬超は猛き勢能く潼関を守れども。直に河より東へ向いて馬超が勢能く諸所の渡を守らん。さるときは河西へ渡ぬとて。あたへどもを其の人に尽く兵を引てひとへに潼関を攻る体をなす。馬超は力を尽して南を守らしむ。されば河より西へ敵思もよらぬ。守の兵をも置ざりしを。徐晃朱霊たやすく渡て敵の後を遮ることを得たり。其後北へ渡りて。車を連ねて陣を構へ。岸に沿て堤を築き。氷の城をきづいて敵に対する弱を。さらせぬ。その人を驕りおごらせ。その備をきと伺ひ間諜の計をもちひて。よく兵の力を養ひ。一旦にきと討て。敵に勝を。疾雷不及掩耳とぞの計なり。兵を用るの変化一道にあらずして論ずがたし。諸将又問て曰く。丞相初め敵の大勢加へ来りてきいて喜びひとへに。いろはるの人で。曹操が曰く。涼州へ國遥に隔て。地険阻なれども。もすれば王化に背くに。その人を征伐ちんとする。要害堅固にして一二年に平げがたし。今ぐく来り集るとは。人ども人ぞ。兵多く。大将思はれぬ。一戦に滅ぶべし。その人を喜びひとり。諸将拝謝

しく曰く。丞相の機謀尋常の及ぶあらざる曹操が曰く我諸將の力を頼ず。幸に勝を得たりとて。おのく恩賞を施し。夏侯淵を長安にとどめて。堺を守らせりまべ。夏侯淵が曰く某命を受て。古の道を守る。馮翊高陵の人に張既字は德容と云人あり。古道を以て京兆の尹となし。長安を守るべし。曹操去るに臨て既をやしなひて。京兆の尹とし。兵を收て。都に回りまべ。献帝みづから鳳輿に乃ち車駕を出て。むかへの曹操を貴んで。賛拜の名を云ず。朝に入て趨らず。劍を帶履を蹈ず。殿に上り。漢の相國蕭何ごとくなりと。弥しりぞけ曹操が威勢がいよく振て。内外ともに怕るごとくなりしとぞ

○張松入蜀難楊修

古の比漢中に。張魯字は公祺といふ。その祖父張陵とらひしりの蜀の鵠鳴山にあり。道書を作り。世の人を惑しりまべ。人ともにこれを敬ふ。張陵ときに死しく其子張衡古の道を行ひ。もし道を學ぶものあるべ米五斗を出さしむ。是こよりて。世乃人ともに米賊とぞ号しける。張衡已に死して。張魯。又古の道を行ひ漢中にありて。みづから師君と号し。来て學ぶものに号しく鬼卒といふ。その頭たるものを。祭酒と号し。大勢の衆を領したるものを。治頭大祭酒と号す。その務たる誠のんとやりて。詐をもて本とせり。病る人あれば。行て壇の前なる静室に入り。みづから己が過をおもひ。くに當面おもひて悔

む。禱て求るの法は病人の名字を書き、罪を服せしの意を説。三通の文を造る。一通を山の頂にあげ、一通を天に奏し、一通は水底に沈む。水官はやがて三官と名く。手自書とは其の病全く癒ることを得たり。米五斗の賂を以て義舎を蓋ひ、舎内に米粟肉を貯へ置、往来の人これを食とる。もし多きときは、天の罰を受、法を犯すものと。先三度恕して改めざれば、その身に刑を施すことを依て。三十余年を経て巴蜀の地に雄据をとり、天下乱れて国遠くはなれ、征伐しがたく難くして、却て張魯を鎮南中郎将に封じて、漢寧の太守を領せしめ、毎年御貢を献らしめ、その時漢中の百姓、地を堀て一切の玉璽を得たりしを、張魯

魯に進めて曰く。近比西涼の馬超破れて、曹操いよいよ逆威を専にし、剣を帯履を蹈ず。朝廷に出ることなく、又その子孫攻きたるべし。師君孫ぶべくして、漢寧王の位に即たまへと防ぐの備をなすべき。闇圃といふものを生じ、漢川の民戸数十萬にあまりて、財豊に粮足り。況や四方を険阻にして、一夫当て守るときは、万卒も通ることを得ざるべし。上天子と匡たまへ。桓文たるべし。次は寶融に及ぶべし。今馬超破れて西涼の百姓奔て、子午谷より、漢中に移るもの数万家に及べり。蜀の劉璋は才なく、智昏して、国を守ることあたはざ。兵を起して、蜀の四十一州を取て本とし、その身は王位に即き、張魯を喜び弟張衛を大将として、蜀を攻んと企てるなり。蜀の劉璋

とやもとへ字は季玉もとは漢の魯恭王の後裔なり劉焉字は君朗が子なり曽て張魯が母を殺しければ弟と仇とむとぶ大将龐義とらへらるのと巴西の大守となり。互に仇とむとぶ大将龐義とらへらるのと巴西の大守となり。常に張魯と拒むおのときに龐義急ぎて告て張魯兵を起して攻来らんと企ると報ずれば劉璋平生懦弱なりて大臆病なる人なの注進ときいて。内大に怕れいそぎ諸大将と相議なる。評議なるに一人もなみ出て曰く君御心やすかれ。某不才なりといへども。三寸の舌を動して張魯が兵を退くべし。諸人これをいへば益々成都の人に張松字を求年なり。この人身の長五尺に満ず眞墨の如く。歯露れ頭尖りて額は鑼のごとく。色黒く鐘に似たり。今蜀の別駕に任ずる劉璋。問て曰く。汝いかなる計ありて張松が曰く。某兼ねて聞く魏の曹操は。ただに中原を掃ひ清めて呂布。二袁を滅ぼし南へ江漢を平げ。北は幽燕に抵る。近ごろ馬超を破りて。天下に敵なきものなり。今君礼物を持て。曹操を頼みて。某が行て。曹操に見へ。大軍を借りて。張魯を伐ちなん。去ぬる建安十三年の冬。荆州に行て。曹操に見へ。ものいふ人と軽んじることを恨む。今又行んといふ。ものへば張松が曰曹操荆州に入りてときに手下に百万の勢あり。その多を帽の集るがごとし。安んぞ人をもてあそぶに暇あらんや。今都の中にあり。文武の群臣とのく事を執行し。其利害をもつて説ちらべ曹操にあ

大軍を引き。張魯を伐ん。劉璋が曰く。まづ今試み。汝が曹操を説べき利害をきかん張松が曰く。某が曹操を説べきに馬超英雄人を勝まさ。韓信黥布が勇あり。丞相に父を殺せる仇い

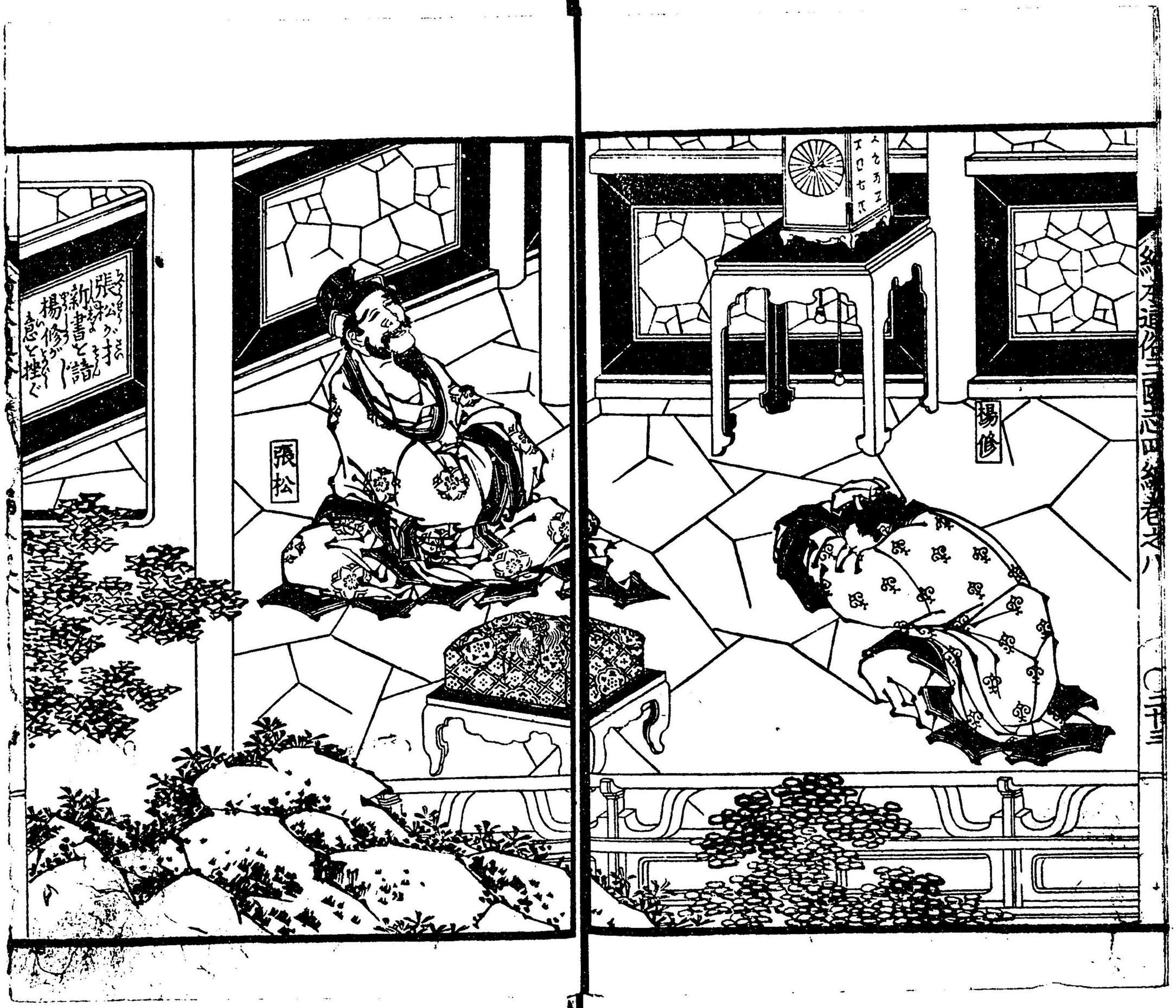
まだ[illegible]く。戰に破るとも。せども。後ろあるらず。仇を報ぜん。今漢中の張魯兵精く粮足れり。百姓ともを尊んぐ。漢寧王とと。久うらうむ[illegible]。必ず又帝位を僭とべし。若帝位を即べらるるず

中原を犯さんもうれども。その手下の良大將を欠馬超も。急み仇を報ぜるのんあらべ。あらだ。隴西の兵をあつめ。張魯を従いん張魯も。馬超を用るときは。虎を翼を添るくその

とき。いぐ。戰ひのうべき。まらば。馬超がまるを従ぐ。漢中の備ろきさのりて。速み攻るべ。一鼓して。破べ。とく。それ。の利害を説き。変を應ぜば。曹操ならざる。許容さべ。今若延引して。張魯とで攻来るときは。荆襄張儀が辯あり。人ども。曹操又従へ。ども。まと悔るとも。遅らん。劉璋大み喜び。

金珠錦綺を調へて。礼物を備へ。とあり。張松を使として。都み赴しむ。張松の中み美く深き所存あり。ひそかみ西蜀四十二州の地理を。繪図み寫し。従者十騎ばかりを引て。都み上る。路みて。その由をきくやのあり。早く荆州へ報ぜく。孔明み告ぐ。孔明美く蜀を取んとのんあり。今張松が魏み行ときいて

ひそかみ人を遣し。都の消息を尋ね聞しむ。去程み張松いたぐ。都へ上て。驛館の中み留り。毎日。相府み伺候して。曹操を見へんとを求むるのとき。曹操。鄴都より回りてぐ。逆威を擅


張松が才
新書と譜
楊修が
意と挫ぐ
張松
楊修

より。物表に傲睨して。天下の政務をかへりみず。日夜酒宴して外に出ることなく。たゞ色白の美男を選び居たり。ある日第三の日張松姓名を通ずることを得て。左右近侍のものに賂を貪り日を経て。曹操に見しむ。曹操堂上に坐して。張松再拜して前に立たしめ。問て曰く。汝が主劉璋いまだ久しく牧年御貢を獻ぜざる。張松答て曰く。蜀道険阻にして。容易く越ゆがたく。しかも盗賊多く害をなす。ゆえに御貢をおさめず。曹操きゝて曰く。いまだ中国を掃ひ清めず。坐ら四方を治むるに。盗賊の害あらん。張松答て曰く。南に孫権あり。北に張魯あり。中に玄徳あり。その外十方二十方の勢を集て。盗賊をおさめ。その相をきらを安んぞ太平とやすべき。曹操是をきいて。心の中怒て発し。ゆえに張松が人物悪しく。容をあらぬ賤を起袖を拂て後堂へ入りけり。左右近侍のものども。内に衝意あり。おもひまいらせべきこうを座を外国の使として。ゆえに来り。詞をもつて。丞相の御心を怒しむ。幸に丞相の寛仁なるをもつて。遠方の人を。面のあたり責るべきや。汝早く回るべしとのたまへば。張松あざ笑て。すゞ蜀の国に。媚諂人佞人ありといへり。ときに階下より。一人ときみ出て。汝が国に諂佞の人ありとのたまへり。都の中に諂佞の人あるべきやうやあり。張松をまねきとゝまらしめ。神貌清白にして。眉薄く眼細き。即ち弘農の人にして。大尉楊彪が子。司空楊震が孫。一門に六相三公を出せり。楊修字は德祖とて。曹操が門下の郎中にして。内外倉庫の主簿

たり。ときに年二十五歳。もとより博學にして辯舌と巧に智識敏捷にして天下の人を屑とせざる。今張松が詞の内に藏せる意あるをきいて。ひたすら迎て書院に坐賓主となりて坐定り。問て曰く蜀道は險阻にして苦勞を經るべし張松答て曰く君の命を受て豈万里の遠を辭とせんや湯に入火を蹈とも入るべし。地理をきゝ張松答て曰く蜀は西郡なり。古の益州にして路は錦江の險あり。地は劍閣の雄に連り廻二百八程縱横三万余里雞鳴狗吠相聞て市井閭閻とまじり斷たる土肥地茂て歳に水旱の憂なく國富民栄て時に管絃の樂あり。土産の阜なる山のごとく積ごとくいまだ是をとゝめ

揚修又問て曰く蜀中の人物孫ぐ〳〵その祥なるをきゝ張松が曰く文に相如が賦あり。武に管樂が才あり。醫に仲景が能あり。ト筮に君平が隱あり。九流三教その極に至てその萃を拔ことのごとく。揚修又問て曰くいま御辺の國大將たる人樂ぶ所の人張松が曰く文武兼備り智勇ともに全く忠義慷慨の士百をもつて數べし。某がごとき不才の輩は車に載斗に量るともその數を盡べからず。揚修又問て曰く御辺いまいたる所職ぞ張松答て曰くこたりに別駕の職を務む。不才にして身に称ぬ抑又御辺に今いたる職ぞ。揚修答て曰くこれ丞相府の主簿なり張松が曰くこれ久しく御辺の大名をきく。代簪纓の家にして父祖尽く輔相の位に登りこれ御辺に朝堂の上に立て天

子と佐け四海の政を專らせざるべし。繞る戰々兢々丞相門下の主簿なる居りしが楊修なるものときいく。人の内を慙愧し顏を赤しとて合く曰くなるを官を居とい人ども丞相常を軍中兵粮の重任を委せ日夜傍を離さざるべし丞相の教を蒙るなるを以て其の職を務む張松あざ笑て曰くなるを聞曹丞相い文を以て孔孟の道を明らかにして孫呉の機を達せざる專ら威を以て強覇の道を務めんと安んぞ御辺を教たまふ楊修が曰く御辺い辺隅の蜀を居るべし安んぞ丞相の大才を忘らんなるを今御辺を忘らるべしとて左右の人をもして箱の中より一巻の書を出し張松を呼んで曰くこれは外を孟德新書と題せり首より尾を至るまでの孫子十三篇を悉く兵法の要道なり張松これを見て問て曰くこの書ていかるる物ぞ楊修が曰く是曹丞相の古を酌ぐ今を準へ孫子十三篇を擬して作る人書なり孟德新書と号て御辺いを丞相と不才と云の書を見て其大才を忘れ後代の模範なるべしと張松すなわち曰くこの書いつぐ蜀の國三尺の童子も能く誦ずんぞ新書と云ん昔戰國のときを作り生きる書なり作者の名を忘るものなり曹丞相いそろを盗んで己のまゝ能とし御辺と欺きなり楊修が曰く丞相の書を秘藏して他人を見せざる曾て聞く三尺の童子も暗誦と云ん張松が曰く我

まんで兼ん。御辺もし疑のあらべ。まことに武を暗誦ん楊修が曰く。孫ぐくを。一返ときまん張松ときまち孟徳新書を誦み首より尾まで至まで一字も差違ときまりはまべ楊修大まに喜き。席を下さ再拝し。御辺一覧しさ。一字も残さたに諳じまんと。揚修んの中まに張松が大才を奇といまさ。二人手を打さ笑ん。揚修んの中まに張松が大才を奇とまうとし。御辺ちばらくさの不わまに居の人某丞相まやーしさ二度対面せきまんとして相府まに行ぐ。曹操まに見へきに丞相まを蜀の使張松を慢まんぐと。問はまへ曹操が曰くその容醜しくして詞の内まにまと裁意あり。まにまとのまへまを喜びぐ。揚修が曰くもし貌とまりて人を取べ恐くは天下の士を失へん。丞相昔孫権をきん忍んで用ひまえり。まにまんで張松を棄のまに曹操が曰く。孫権その文章世まに播きと。まにまとのまへまを殺ときまにのべぐ張松又いまある鉄まに揚修が曰くさの人海を倒まに江を翻へきの辯風を嘲り月を弄の才ありぐきまに丞相の撰ドまへ孟徳新書を一度まにて即ちよく暗ド誦まに一字の差もくして水を瀉ぐごとし浩る博聞強記の才へ世まに罕なるのまさいまきの書へむ。戰国のときまに無名氏の作るあるまして蜀の國まへ三尺の小児ものよく暗ド誦とやへ曹操が曰く。まにまきの書を撰きとのぐのまら古人を暗まに合ひまるまんとて引きたて其書を焼しむ。揚修が曰くかまに再び丞相まに見へんと孫ぐまに丞相孫ぐくを。対面ありて大國の気象をきまらへめまに人曹操が曰くさの人遠く来てまに兵を用ひまにとときまら

だ。おれがようく大言を出さ。明日は西教場へ出て。勢揃をさんぬ汝は張松と。ともに人来て。すぐに大将士卒の壯なるを。こゝにあやまるべし。次の日張松と引て。西教場へ出りゝ曹操ぶがら虎備の雄兵五万余騎を率して。四方八面へ隊伍を乱さず。備を立甲袍燦爛として。戈戟の光霜と凝て。旌旗風にひるがへり人壯なる馬強し。張松目を斜にして。ぐく久くおもてをそむけて。曹操前へやり。問て曰く。汝ぶ蜀の國を浩る英雄の士卒ありや。張松答て曰。蜀の國は卒をかくのごとき兵華をこそ。但仁義をもつて天下を治んとおもふ。曹操おもてをそむけの中大に怒り。俄に色を変じけれども張松昂然として。全く怕るの意なく。目を斜にして相凌の気あり。楊修きりに月加をれども張松少も怕ることなし。時に曹操やがて。天下の輩をこゝに。芥のごとし。大軍のむかふ。戦に勝ぬといふとも。攻るを取ることなかれ。順に生ることを逆に死ることを用ひて富貴なるもむるるあらんや。又能人の九族を滅ぼす。汝をこゝに来たるは。張松が曰く。げに丞相の兵を率して。向ふ戦べからずして勝攻れば。必ず取ることを。元より知ることなり。曹操が曰く。汝ぞ何ぞ服せざるや。張松が曰く。丞相むかし漢陽の呂布を攻て宛城を張繡と戰ひ。赤壁を周瑜と怕ることを。華陽の関羽に奪はれ潼関にて鬚を切て袍を棄てにげ。ことごとく天下の敵をうしなふ。曹操大に怒り。憎き腐儒者なるかな。我旧失

ちとい〳〵く。恥とあたゝる。早く引出して。首を斬れといふて。武士に命じ。けまべ場修きうを諫めて曰く。今張松が罪斬てさへ。べつとへやせども。蜀道の難所と經て。遥々と御貢と奉来れり。今おまとて殺しの。ば恐くは。蛮夷の人と傷らん。知ぬのいたの人不遜の詞と出して。斬まなりとやーー。知ざるものゝ。丞相うまど礼物乃少きとやいて。殺しの人りと。沙汰さべーー。孫ぐくを命と助て回ーーゆえ曹操ちゝ怒の気休ざりーーども。苟彧又強諫ーーもるゝ。ゝりと宥ーーて。乱棒と打出と。張松門外と打出され。空く國とへらんと。おけるぐゝの中と思ひりるゝまと本曹操と蜀の國と試らんとて。来りーーゝるんぞ。計ゝ。人と軽んじて。此のごとく無礼なるべーーとゝまと已と國と出るとき。諸人の前と大言と生きり。今若いたぐゝらと回りるべ。諸人の物笑たるべー。荆州の劉玄德い漢室の皇叔ゝーーて。仁義久く四海ときこゝ。今ゝまとされす。荆州と いとりとの人と試く。別と思案と運さんとて。馬とのり。従者と路といそいで。荆州の堺と望て。進んで郢州と近付けまべ向す。隊の軍馬。四五百騎ぐらぐ出来り。真先なる大将馬上すり問て曰く。おゝ来るゝ蜀の張別駕ゝて。なるゝ。張松答て曰く。おうり。御辺いゝ又いうなる人ぞ。の大将とのまときくとひとーーく馬すりとべ下り。趙雲久ーーく。の石と待てゝとやと。張松問て曰く。荆州乃趙子龍ゝてゝる。趙雲ぐ曰く。某主人玄德の命と受大夫の遠險阻と馳て。りーーの路とも御通あらべ。酒食とたてまりりて。旅程の労とおぐさめ。國の堺まで送りーーせとて。某ぞーーて。むゝへ

志むとて。士卒を命じて。酒肴ときげ出し。門うら地をひざまづいて。謹んでおれて進けまゐ。張松、人をおもひ入るべ人をお。玄徳、寛仁にして。客を愛し。人をいたゞく。今果して此のごとし。さるにても。曹操、漫々人と軽んじて。礼義をしらず。奸賊なりとて。卒を趙雲と杯盃を傾け。とりを馬とたゞらべて。荆州の堺をいさり。日をでを暮を及んで。驛館の前を着けまゐ。門外を百余人二行を分きて。侍立し。鼓を打て相迎へ。一人馬の前をさゝ礼をなして。やけるへ。某は荆州の大将関羽なり。主人玄徳の命を受驛館にて。らんく。大夫とむらべ。張松、馬より下て。館中を入けまゐ。関羽、酒宴をなして。終夜もてなす。次の日。驛館を出て。関羽、趙雲と伴い。馬を早めて五六里ばかり行けまゐ。向より一族の人馬出来り。

真先なるは漢の劉皇叔。左を伏龍あり。右を鳳雛あり。なるを。張松、おどろきたるとこそ。おとぐく馬より下けまゐ。張松、へまゐらんで礼を施す。玄徳の曰く。馬を久〳〵大夫の高名をきいて。雷の耳を裏ぐ〳〵。眼らくは雲山路遥〳〵。いまゞ教をきくとあたへど。今都より國を回りをとき。ゆ〳〵ゆるまを相迎へ幸を。り。棄をへどんべ荆州を伴い行て。片時渇仰の情を叙ん。張松、大を喜び。馬を双べて。荆州を入りけまゐ。玄徳、席をもけてのべく持成たゞよの珍味の物。詰してすゞと蜀中のもとを問ど。又劉璋が安否をも云ど。酒宴杯刺をおよびけり。張松も玄徳、蜀のもとを問を。従へて。答んとおもへけれども。始終その問をうるしべ。味へを。張松、問てけるへ。今皇叔荆州を寄

りまゐらす郡の牧いう程うけぞ孔明答て曰く。荆州へ呉の孫權より。暫らく借たる地をてはなまきりを取返さんとやせた。張松が曰く。呉の孫權ハ江南八十一郡を横領して民強く国富ゆゑ主人いま孫權の婿たるを以て權を恐らく身を寄こゝろ志を多くの足りとせず。荆州をも呑んとするを龐統がその人足りとせず。荆州をも呑んとするを龐統が曰く。主人ハ漢朝の皇叔なれども却て國を保ちあたいはゞその余ハ漢の逆賊をだにかゝる力をもつて郡を押領するなり。玄德の曰く。無用のものを宜ひそ。きゝの德ありて妄に高位を望み郡を領ぜんや張松が曰く。天下ハ一人の天下なり惟德あるものゝ天下を保ちいかゝ況や君ハ漢室の宗親にして仁義をもて四海を及高位を登り郡を領ゆとをいへども及ばず正統を継ぐ帝位を即ものとも不可なりとせん玄德手を拱て惶恐して曰く。先生の初安んぞ我を當らんと張松をとゞめて三日ぶのゝ酒宴して卒を蜀のことを問ふ張松を送りて盃をあげて張松をあたゝまれいぶ大夫のもてなしを恩を蒙る已に三日交をむすんで早くも相別る又いつまのときを教をきくことを得んといふて潸然として涙をながす張松ハ中を抱りて玄德ハ元弟の風あり今ときを捨るを惜のべきを。ドもその人を蜀の國を献らんとて乃ち出てやりるハ其朝暮を近侍して大馬の労を致ざることを恨む其荆州をもて足るを

東の孫權ありて。常に鯨呑の志をす。北に曹操ありて。毎に虎踞の威を示さなさ〜く恋の地にあらざる玄德の曰く。こもとより。こゝまできれども。身を安んぜべきにあらざる得ざる張松ぶ曰く西蜀の地は四方に険阻にして。沃野千里民殷に國富帯甲十万にして天府の國なり知能の士に恵皇叔の德を慕て久しくいま荆州の兵を引て。その國を取ゆゑ漢室を興さんと。目前にあり。玄德の曰く争うることを得ん太守劉璋も亦これ漢室の宗親にして。久く蜀の國を保ち恩沢を百姓に布施して。他人安んぜられて動きをとて得べけんや張松ぶ曰く其は主を賣て富貴を求ん為にあらざる。今君の德を感じて肝膽を披き瀝。主人劉璋久く蜀を保とせども天姓暗弱にして。賢人を用ひて。國を治るをあたはざる。ちらのこちらざる張魯北の方漢中にあり。文武をきらざる賞罰を正ぶ。人のんとぐく離れて。有德の君を得んとをゝ。某はの度都に上りて。曹操に蜀を献らんとのんなり。料ざるに曹操漫に逆威を振ひ。英雄にして。君をあざむく。久しうらざるして。漢朝の大なる禍をおこさん。君ぶ蜀を取て基とし。次に漢中を攻取て。その中國を取て。再び漢室を興して。天朝を正しまゝ名を青史に記して。万代に及べし。君果して。蜀を取んとのんあらば。某ぶ大馬の労を致して。内應して扶べし。玄德の曰く。深く先生の恩を感ぜ。今國を貪りて。同宗と戦はんとするべ。天下の人うらざる笑ひ罵ん。張松ぶ曰く。君天の時と人のゆとをしりのへどや。若人のゆとをしりて。天の時に背べ恐くは日月

むまーく晩ん大丈夫の世ゑ居やきゑ努力て。功業と立て。人より先ゑ鞭と着べー。今り時ゑの幻て取るべんべらるらぎ他人ゑ取れく。後悔ととも及ぶまじ。玄德の曰くるきく。蜀の道へ千山万水嶮峻とーて。車い軌と方ぶるとと克ぎ。馬い轡と聯るとと得ぎと。若されと取んゑいらまる計と用ゆべき。張松箱の中より。一巻の繪図と出ーて曰く。青深く君の恩德と荷ゑの人ゑ之て献る。りーゑの圖と。御覧あらべ。おのがら蜀道の地理と志りるべー。玄德ひらきて人で祥ゑ地理と写ーて。行程の遠近地形の廣狹山川の險要府庫錢粮戸数ゑ至るまで。一ーゑ明白なり。張松又曰く君速ゑ思ーー召立ゑ人。其深く交る心友二人あり。法正字い孝直と。孟達字い子慶とるり。もーゑの二人ゑらゑ来べ方ゑ其ぶどくゑ事と議ゑ人。玄德手と拱ーて。謝ーて曰く。青山不老緑水長存他日ならず先生の恩と報ぜん張松曰く。某いゑ仁義の主ゑ遇て情と尽ーてやーゑどんべあらば安んぞ報と望ゑやとて。相別ゑけれべ孔明龐統へ。ゑ長亭の下ゑ再拝ーー。関羽趙雲ハ遠く拾十里の外ゑ送る

繪本通俗三國志四編巻之八終

122
74
28

繪本通俗三國志

四編八

T24
74
28